

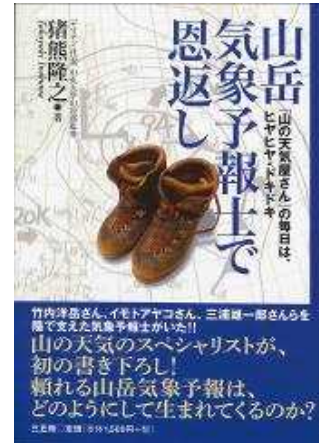
中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

山岳部の生徒に薦めたい「山岳気象予報士で恩返し」(猪熊隆之著：三五館刊)

茅野市の山岳気象専門会社「ヤマテン」代表で、中央大学山岳部監督でもある猪熊隆之のことはご存じだろうか？その猪熊さんの本が出版された。失礼ながら、以前猪熊さんに会ったとき、なんと爽やかなそして腰の低い方だろうという印象を持った。猪熊さんの経歴は、断片的には知っていたが、この本を読んで、彼の登山体験と壮絶なまでの病気の克服、その末に気象予報士という仕事に辿りつくまでの軌跡を知ることができた。大学時代の富士山での滑落、ヒマラヤ遠征を直前に控えての急性肝炎の発症、後輩の死、慢性骨髓炎……。次から次へと色々な苦難が押し寄せてくる。これらをどう乗り越えてきたか、そしてそこから得たものとは……。



並の人間だったら、これらの一つさえ乗り越えられないのではないだろうか？少なくとも僕だったならそうだ。しかし、どんな逆境にあっても希望を失わず、前向きにとらえて、それをバネに登山を続けてきた猪熊さんは、決して恨み言を言わない。そればかりか、自分が生かされていることへの感謝の言葉が語られる。すべてのものに意味がある、どんなに辛いと思えることでも、それは自分にだからこそ与えられた試練だと言い、「自分自身を変える」ことでどんなに「苦しいこと」も「楽しいこと」へ変えられるのだ、病気や精神的な苦しみは、人生のスパイスにしか過ぎないと思いたい、と。題名にもある「恩返し」という言葉にそれらがすべて凝縮されているように思った。

以下に本文中の言葉をいくつか拾ってみよう。前後の文脈もなく拾う失礼を許していただきたいが、ここにはこれから山を始めようという若い岳人たちにぜひ読んでほしいメッセージがある。その意味で高校山岳部の生徒たちに読んでほしいと思う。

「天気の詳細をする上で大切なのは山の地形を徹底的に頭に叩き込むことである。そこから山の気象状況を頭の中でイメージしていくわけだ。このイメージづくりの際に私が心がけているのは雲や風の気持ちになることだ。たとえば『自分が雲だったらどこまで上がっていくだろうか』『自分が雲だったら成長するだろうか、消滅してしまうだろうか』といったように想像を膨らませるのである。」

「山岳部に入り、山に出合ったことで、一歩ずつ登ることの楽しみを覚えてきた。一歩登れば景色が変わり、もう一歩登ればさらに景色がかわる。そこに大いなる自分の可能性があるのかもしれない。」

「たとえば、山や登山活動がもたらしてくれる充足。それは本当に大きいもので、私は心から感謝している。だから、『山は危険だからやめなさい。』という言葉にはすなおにうなずくことができないのだ。」

「登山することを若い人にこそ勧めたい。しかしながら、大切なものを失うこともあ

るのを、これから登山を始める人には伝えていかなければならないと思う。命を守らなければならぬからこそ、登山では妥協をしてはいけない。」

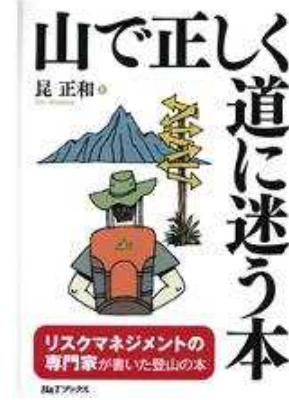
僕の中途半端な紹介では、この本の素晴らしさを伝えることはできないが、その一端でも紹介できたとすれば幸いである。

山で正しく道に迷う本(昆正和著:日刊工業新聞社刊)

ちょっと人を食ったような題名だが、なかなか含蓄のある本であった。著者は山に関して傑出した肩書を持っているわけではない。専門は、企業に対する「リスクマネジメントアドバイザー」だそうだが、高校時代から山に登り、一般ルートはもちろん沢登りやバリエーションルートもこなしてきたという。

山を歩いていてちょっとしたミスを犯したり、遭難事故一步手前という経験をしたりしたことがない人はいないだろう。ご多分に漏れず僕もその一人なのだが、多くは事なきを得て、そのまま武勇伝になってしまう。だれでも直面するかも知れない戸惑いや焦り、だれでも判断に迷うかも知れない困った状況、だれでもうっかり陥るかも知れない自然のワナなど見過ごしがちな、取るに足らないたわいのないこと(トリビア)は、ちょっとした油断や心の盲点といった小さなきっかけから起こる。こういったさまざまな山のリスクとの向き合い方を、リスクマネジメントの視点から掘り下げたのがこの本だ。

著者は、「山のリスクは山という“場所”にあるのではなく、私たち自身が山で“作り出してしまう”ものであり、人間がかかわって初めてリスクが生まれ、それが顕在化したとき事故や遭難と呼ぶものになる。」という。のんびり楽しく山登りをする際、リスクをまったく感知しないでトラブルに遭遇する場合と、リスクの性質を理解した上で遭遇した場合とでは、危険性や心の余裕などに大きな差が出る。つまりこれが、正しい道迷いか正しくない道迷いかの分岐点だということである。これは、そのまま実生活にも当てはまることも言えるが、何かちょっとしたトラブルが発生した時、冷静であれば的確な判断ができたのに、パニックになってしまい余計に事態を深刻化してしまうことは珍しいことではない。著者は、山を楽しむための五つのルールとして「もしも」の発想(どんな事態も想定外にしない準備)、「プライオリティ」(次にやるべきことに優先順位をつける)、「メッセージ」(自分が出すメッセージ、受け取るメッセージ、を的確に判断)、「見る」(確認する、情報を収集する、観察する、意識を集中して見る)「選択する」(自分の命と下界の基準)を挙げているが、これは、正鵠を射ていると思った。著者の山日記などを例に挙げながら、ポイントを押さえて書いてあるので、気楽に読み進めた。



編集子のひとこと

年明け早々、大風邪をひき、3日も寝込んでしまった。まあ、たまにはゆっくりするのもいいかと年末から今日までほとんど閉じこもり……。明日は、風邪も治ったので、池工の生徒と新春山行で戸谷峰へ登る。今年もよろしく願いいたします。(大西 記)